二〇二六年一月三日

初雪に甍の波も薄化粧　董雨
四阿に集ひお喋り初雀　康子
ご機嫌の曾孫のバアに初笑ひ　よし女
庭に得し実千両添へ祝い膳　あひる
玲瓏と寒満月や山襖　むべ
見上げれば星降るやふに細雪　えいじ
鳶の笛蒼天高く淑気満つ　むべ
ほうれん草スーブで祝ふ七日かな　董雨

二〇二六年一月二日

連山の尾根脈々と淑気満つ　きよえ
挑戦の一語朱書きす初日記　かかし
着地して落葉を翔たす初鴉　むべ
まだまだと希望をつなぎ喜寿の春　うつぎ
屠蘇を注ぐ戦火くぐりし猪口をもて　あひる
初景色天守に望む海静か　やよい
菩提寺の花びら餅に舌鼓　よし女

二〇二六年一月一日

年末の折込み赤が席巻す　よし女
祝箸添へて病院食とどく　みきえ
銭湯の湯ぶねで交はす御慶かな　千鶴
初礼拝希望いただくメッセージ　きよえ
初売りや大墨書なる左馬　康子
百寿なほ目指す夢あり年明ける　董雨
鳶描く大き八の字初御空　むべ
蝋梅の綺羅閉じ込めし蕾かな　よし女

二〇二五年一二月三一日

祝箸揃え明日の待たれけり　明日香
ベングラーの第九に酔ひて年送る　うつぎ
身罷りし妣寧かれと年惜しむ　せいじ
万感をホ句に託して年惜しむ　せいじ
母訪ね陽の窓に置くシクラメン　山椒

二〇二五年一二月三〇日

年の瀬を独りにせんと子等きたる　たか子
寒風裡ビオラに元気貰ひけり　うつぎ
鶴首に投入れしごと実千両　あひる
熊憎し実つきのままに柿伐られ　こすもす

二〇二五年一二月二九日

焼かれたる藁跡に出づ双葉かな　あひる

二〇二五年一二月二八日

独り居のあれこれ省く年用意　やよい
煤逃げの揃ふ馴染みの茶房かな　澄子
藪騒のふと静まれば笹鳴ける　こすもす
遺愛なる松を白磁に年用意　うつぎ
サンタさん来るまで待つと子らい寝ず　山椒

毎日句会みのる選・二〇二六年一月五日